魚類学雑誌 66(1):109–111
DOI: 10.11369/jji.18–045
2019 年 4 月 25 日発行

記録・調査報告　*Note*

大阪湾から得られたアカメ *Lates japonicus*：25 年ぶり 2 例目の記録

木村祐貴 [1]・山中智之 [1]・松井彰子 [2]

[1] 〒 599–0311　大阪府泉南郡岬町多奈川谷川 2926–1　地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所水産技術センター
[2] 〒 546–0034　大阪市東住吉区長居公園 1–23　大阪市立自然史博物館

（2018 年 12 月 4 日受付；2019 年 1 月 16 日改訂；2019 年 1 月 16 日受理；2019 年 3 月 1 日 J–STAGE 早期公開）

キーワード：アカメ , *Lates japonicus*, 大阪湾 , 絶滅危惧種

魚類学雑誌
Japanese Journal of Ichthyology
© The Ichthyological Society of Japan 2019

Yuki Kimura*, Tomoyuki Yamanaka and Shoko Matsui. 2019. Second record of Japanese snook *Lates japonicus* from Osaka Bay, Japan. Japan. J. Ichthyol., 66(1): 109–111. DOI: 10.11369/jji.18-045.

Abstract　A single female specimen (724 mm SL) of Japanese snook, *Lates japonicus* Katayama and Taki, 1984, was corrected in the mouth of the Ajigawa river, Osaka Bay, Japan on 20th August 2018, representing the second record of the species from Osaka Bay. The present record implicates that this fish was not resident but appeared accidentally in Osaka bay, because the bay lacks no suitable over-wintering habitat for *L. japonicus*.

**Corresponding author: Research Institute of Environment, Agriculture and Fisheries, Osaka Prefecture, 2926–1 Tanagawa-tanigawa, Misaki, Sennann, Osaka, 599–0311, Japan (e-mail: KimuraY@o-suishi.zaqrs.jp)*

アカメ科魚類は世界で 13 有効種が知られており（Nelson et al., 2016），日本からはアカメ *Lates japonicus* とアカメモドキ *Psammoperca waigiensis* の 2 種が報告されている（波戸岡，2013）．このうちアカメは日本固有種であり，東京湾から鹿児島県の太平洋沿岸，種子島などから散発的に報告がある（萩原・島村，2013；波戸岡，2013）．しかしながら分布の中心は宮崎県，高知県，徳島県南部の河口周辺の沿岸に限られており（田代・岩槻，1995），環境省レッドリストでは絶滅危惧 IB 類に選定されている（環境省，2018）．2018 年 8 月 20 日に大阪湾奥部においてスズキ *Lateolabrax japonicus* とクロダイ *Acanthopagrus schlegelii* を対象に操業していた漁業者がアカメを漁獲した．大阪湾では 1993 年に本種の採集記録があるが（鍋島ほか，1994），以降 25 年間にわたって出現報告は一切なかった．本報告では今回採集された標本に基づいて本種の大阪湾 2 例目の記録を報告するとともに，形態的特徴を詳細に記載した．併せて，大阪湾の環境や採集水域の状況をもとに，本種の出現の経緯について考察を行った．標本の作製と登録は本村（2009）に，計数・測定方法は中坊（1993）にしたがった．ただし，体高は津村ほか（2003）にしたがい背鰭基底始部より垂直に下ろした長さとした．鰓耙数については上枝，中央，下枝に分けて計数した．標準体長は体長と表記した．本報告で使用した標本は大阪市立自然史博物館（OMNH-P）に登録，保管されている．

Lates japonicus Katayama and Taki, 1984
アカメ（Fig. 1）

標本　OMNH-P 46865，体長 724 mm，雌，大阪府大阪市此花区安治川河口（34°39'13.8″N, 135°25'08.6″E），水深 11 m，樋川健二，刺網，2018 年 8 月 20 日．

記載　背鰭条数 VII-I, 11；臀鰭条数 III, 8；胸鰭条数 16；腹鰭条数 I, 5；側線有孔鱗数 61；側線上

Fig. 1. Fresh specimen of *Lates japonicus*. OMNH-P 46865, 724 mm SL, the mouth of the Ajigawa river, Osaka Bay, Japan.

方横列鱗数 7；側線下方横列鱗数 12；第一鰓弓鰓耙数 2+1+6.

体各部測定値の体長に対する割合（%）：体高 33.8，頭長 35.2，吻長 7.9，眼窩径 3.5，両眼間隔 4.6，上顎長 9.9，尾柄高 12.7，尾鰭長 15，背鰭基底長 41.5，背鰭第 1 棘条長 2.8，背鰭第 2 棘条長 4.9，背鰭第 3 棘条長 13.8，背鰭最長軟条長 11.3，臀鰭基底長 12.7，臀鰭第 1 棘条長 3.3，臀鰭第 2 棘条長 5.8，臀鰭第 3 棘条長 5.1，臀鰭最長軟条長 11.3，胸鰭長 13.7，腹鰭最長軟条長 16.9.

体は長楕円形で側扁する．頭部背縁は眼窩後縁上方でわずかに凹む．眼は小さく，眼窩径は吻長より短い．下顎先端は上顎先端より前方に突出する．上顎後端は眼窩後縁より後方に位置する．前鼻孔と後鼻孔は近接する．主鰓蓋骨に 1 棘をもつ．前鰓蓋骨下縁に 4 棘をもつ．吻部，眼窩下方および両眼間隔は無鱗で，頬部から鰓蓋部および体部から尾柄部にかけて強固な鱗に被われる．体部の側線は背縁に沿ってゆるやかに湾曲し，尾柄部側面の中央を走り，後端は尾鰭の後縁に達する．背鰭は 2 基からなり，互いに近接する．第 1 背鰭鰭条は強固な棘で構成され，第 3 棘が最長．臀鰭起部は第 2 背鰭起部より後方に位置する．臀鰭棘は強固で第 2 棘が最長．腹鰭基部に鱗状突起をもつ．尾鰭は截形.

生鮮時の体色　頭部と体部の背方は一様にやや緑がかった鉛色，側面から腹方にかけては鈍い銀白色を呈す．背鰭と尾鰭は黒褐色，臀鰭は淡黒褐色，胸鰭および腹鰭は灰白色．眼は赤みを帯びる.

分布　本種は日本固有種で，東京湾から鹿児島県内之浦湾までの太平洋沿岸，大阪湾，香川県，愛媛県宇和海，鹿児島湾，種子島に分布する（荒賀・田名瀬，1987；Iwatsuki et al., 1993；津村ほか，2003；明石・栩野，2008；萩原・島村，2013；波戸岡，2013；岩坪・大富，2015；本研究）.

備考　本標本は主鰓蓋骨に 1 棘をもつこと，側線が尾鰭後端まで達すること，腹部基部に鱗様突起をもつこと，上顎よりも下顎がやや突出すること，臀鰭第 2 棘が臀鰭第 3 棘よりも長いこと，前鰓蓋骨下縁に棘をもつこと，側線有孔鱗数が 61 であることなどが Katayama and Taki (1984) や波戸岡（2013）の報告した *Lates japonicus* の特徴とよく一致し，本種に同定された．本標本を開腹して生殖腺を確認したところ成熟した卵巣が認められた．また，消化管からは何も検出されなかったが，かなり発達した脂肪体が腹腔内にみられたことから栄養状態は良好であったと考えられる.

本種は仔魚から成魚に成長するまで河口や内湾などの感潮域や汽水域で過ごし，成魚になると海域へと生息域を拡げることが知られており，特に未成魚期まではアマモやその他の水草が繁茂している環境に強く依存していると考えられている（木下・岩槻，1996；長野・永井，2015）．高知県では県東部から西部までのいたるところで採集および目撃の記録があり，県中部に位置する浦戸湾はアカメの保育場となるコアマモ群落が多く，仔稚

魚から成魚までの好適な生息環境が存在することで個体数密度が非常に高いと考えられている（長野，2016）．本報告で用いた標本が採集された安治川河口は，近隣に大型商業施設やテーマパーク，工場が立ち並ぶ開発の進んだウォーターフロントである．本種が好む河口域ではあるものの，埋め立ての影響で海流が滞留し，濁度も高いためアマモ場が形成されず，本来の本種の生息環境とは大きく異なる環境である．また，本種は水温が 16 度を下回ると摂餌をやめて底層で静止し，16 度以下が続くとやがて餓死することが知られている（田代・岩槻，1995）．大阪湾の海水温は近年上昇傾向にあるが（秋山・中嶋，2018），2014–2016 年に大阪湾内の 20 定点で実施した浅海定線調査の結果，2–4 月の各月の表層・底層の海水温はすべての定点において 16 度を下回っていた（大阪府立環境農林水産総合研究所，2017）．冬季は温排水の流出場所に局所的に蝟集している等の可能性は否定できないが，現在の大阪湾はアカメの越冬には適さない環境であり，現時点では太平洋沿岸域に生息していた個体が海流変動などの影響で偶来的に来遊してきたと考えることが妥当であろう．ただし，今後大阪湾周辺海域の海流変動などによって来遊頻度が上昇し，大阪湾内の冬季海水温がさらに上昇するなどの海洋環境変化が続く場合，大阪湾内での成魚の越冬，定着する可能性は十分考えられる．ただし，大阪湾沿岸には未成魚期までのアカメの生育に必要なアマモやその他水草が大規模に繁茂する河口域がほとんどなく，現在の沿岸環境が維持される限りは再生産に至る可能性は低いと考えられる．

謝　　辞

本研究をおこなうにあたり高石市漁業協同組合の樋川健二氏には本標本と本標本に関する貴重な情報をご提供いただいた．大阪市立自然史博物館の波戸岡清峰氏には標本の収蔵に際してご尽力いただいた．この場を借りて御礼申し上げる．

引 用 文 献

明石英幹・栩野元秀．2008．香川県沿岸海域から初記録のアカメ *Lates japonicus*．南紀生物，50: 235–239.

秋山　諭・中嶋昌紀．2018．不等間隔の月例観測データから見る大阪湾表層水温の経時的諸特性．水環境学会誌，41: 83–90.

荒賀忠一・田名瀬英朋．1987．和歌山県沿岸におけるアカメの採捕記録．瀬戸臨海実験所年報，1: 59–61.

萩原清司・島村嘉一．2013．東京湾から採集されたアカメ（スズキ目：アカメ科）．横須賀市博物館研究報告（自然科学），(60): 31–32.

波戸岡清峰．2013．アカメ科．中坊徹次（編），pp. 938–943，1350–1351．日本産魚類検索　全種の同定　第三版．東海大学出版会，秦野.

岩坪洸樹・大富　潤．2015．鹿児島湾初記録ならびに西限記録のアカメ *Lates japonicus*．日本生物地理学会会報，70: 239–243.

Iwatsuki, Y., K. Tashiro and T. Hamasaki. 1993. Distribution and fluctuations in occurrence of the Japanese centropomid fish, *Lates japonicus*. Japan. J. Icthyol., 40: 327–332.

環境省．2018．環境省レッドリスト 2018，汽水・淡水魚類：https://www.env.go.jp/nature/kisho/hozen/redlist/index.html.（参照 2018-8-21）

Katayama, M. and Y. Taki. 1984. *Lates japonicus*, a new centropomid fish from Japan. Japan. J. Icthyol., 30: 361–367.

木下　泉・岩槻幸雄．1996．アカメ．pp. 103–106, 158–159．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（III）．日本水産資源保護協会，東京.

本村浩之．2009．魚類標本の作製と管理マニュアル．鹿児島大学総合研究博物館，鹿児島．70 pp.

鍋島靖信・安部恒之・日下部敬之・山本圭吾・波戸岡清峰．1994．大阪湾（淀川河口）でアカメがとれた．Nature Study, 40: 2–4.

長野博光．2016．高知県における釣り人と漁業者によるアカメの記録（スズキ目：アカメ科）．四国自然史科学研究，9: 21–27.

長野博光・永井宏樹．2015．高知県香南市赤岡漁港に設置した柴漬けで得られたアカメの未成魚（スズキ目：アカメ科）．四国自然史科学研究，8: 19–21.

中坊徹次．1993．魚類概説．中坊徹次（編），viii–xxiii．日本産魚類検索　全種の同定．東海大学出版会，秦野.

Nelson, J. S., T. C. Grande and M. V. H. Wilson. 2016. Fishes of the world 5th edition, John Wiley & Sons, Hoboken, New Jersey. 752 pp.

大阪府立環境農林水産総合研究所．2017．浅海定線調査．平成 26–28 年度事業資料集：http://www.kannousuiken-osaka.or.jp/publication/suisan_shiryo/index.html.（参照 2018-8-28）

田代一洋・岩槻幸雄．1995．アカメの飼育における成長と摂餌特性．日本水産学会誌，61: 684–688.

津村英志・水野晃秀・山本孝雄・須田康彦・山本貴仁．2003．宇和海周辺で記録されたアカメ．愛媛県総合科学博物館研究報告，8: 23–26.